

第 11 講

「主体的・対話的な深い学び」の実現

【学習到達目標】

- ・「主体的・対話的で深い学び」について、具体例を挙げて説明できる。
- ・ICT を活用した「主体的・対話的で深い学び」を実現する授業をデザインできる。

1. 「主体的・対話的で深い学び」の実現

(1) アクティブ・ラーニングと「主体的・対話的で深い学び」

学校教育でのアクティブ・ラーニングは、「教員による一方的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称（文部科学省）」と定義され、大学教育の質的転換を図るために提唱されたものだった。その後、包括的な教育改革の流れの中で、初等中等教育の授業改善に適用されることになった。

子供たちが成人して社会で活躍する頃には、生産年齢人口の減少、グローバル化の進展や絶え間ない技術革新等により、社会や職業の在り方そのものが大きく変化する可能性が指摘されている。そうした厳しい挑戦の時代を乗り越えていくためには、伝統や文化に立脚しながら、他者と協働し価値の創造に挑み、未来をきり拓いていく力が必要とされている。このような時代だからこそ、子供たちには、変化を前向きにとらえて、人間らしい感性を働かせ、社会や生活、人生、未来を豊かに拓いてほしい。

資質・能力を育成する場としての学校の役割は大きくなっている。学ぶことと社会とのつながりを意識し、「何を教えるか」という知識の質・量の改善に加え、「どのように学ぶか」という、学びの質や深まりを重視することが必要とされる。現行の学習指導要領の特徴は、学習者主体のコンピテンシーベースへの転換である。これを明確化して実現するために、児童が身に付けるべき能力を3つの柱に整理し、これを育むため子供たちが「どのように学ぶか」として、「主体的で・対話的で深い学び」という教育の方法が示された。

(2) 「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善



新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～
(答申)



主体的・対話的
で深い学びを実
現する授業改善
の視点について
(国研、2020)

子供たちに「生きる力」を育むため、目指すのは「何ができるようになるか」である。そのために、子供が「どのように学ぶか」の姿として示されたのが「主体的・対話的で深い学び」である。指導する教師の側からすると、子供の「主体的・対話的で深い学び」の実現のためには、授業をどのように変えていけばよいか、ということが、授業改善の視点となる。

「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善の具体的な内容については、中央教育審議会答申（2016年12月）において、以下の3つの視点に立った授業改善を行うことが示されている。教科等の特質を踏まえ、具体的な学習内容や児童の状況等に応じて、これらの視点の具体的な内容を手掛かりに、質の高い学びを実現し、学習内容を深く理解し、資質・能力を身に付け、生涯にわたって能動的（アクティブ）に学び続けるようにすることが求められている。

- ① 学ぶことに興味や関心をもち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しをもって粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる「主体的な学び」が実現できているかという視点。
- ② 子供同士の協働、教職員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ、自己の考えを広げ深める「対話的な学び」が実現できているかという視点。
- ③ 習得・活用・探究という学びの過程の中で、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう「深い学び」が実現できているかという視点。

以下、各視点を具体的に説明する。

「主体的な学び」では、どうしたら見通しをもって作業したり、粘り強く考えたりすることができるだろうかを視点とし、うまくいかないところを修正したり、よりよいものを目指して見通しをもったりして、粘り強く取り組む力が身に付く授業へと改善する。

例えば、児童が「主体的」になるためには、課題の内容やレベルにより、児童の思考は大きく左右される。ずっと問いをもち続けられるような工夫が必要となる。

「対話的な学び」では、どうしたらグループ間の議論を深め、様々な視点で考えを深めさせられるだろうかを視点とし、グループに分かれて、様々な方法で調べ、考えた結果をグループ間で共有することで、周りの人たちと共に考え、学び、新しい発見や豊かな発想が生まれる授業に、改善する。

グループワークで思考を深めさせたい「対話的で深い学び」の場面では、多様な考え方ができ、すぐには答えにたどり着けない深い課題設定が必要となる。児童の気付きだけに任せると、浅い思考で終わってしまいがちなため、教員からの追加課題や、追加ヒントを与えることが重要となる。また、児童の思考は、子供にとって面白い興味深い課題でないと活性化されないため、児童の実態に合わせて子供自身が知りたい、解決したいと思うことから、何を調べればよいのか、どうまとめると伝わるのかなどを真剣に考えるようになる「学びに向かう力」を育てる。ここでは、児童に当事者意識をどうもたせるかが重要となる。

「深い学び」では、どうしたら知識をつなげ深く理解したり、考えを形成したりできるだろうか、を視点とし、資料を読み取り、根拠に基づいて問いについて考察し、互いの意見を出し合ったり、話し合ったり、話し合いの結果を踏まえ、さらに考察し、様子や特色について話し合ったり、互いに説明したりするなどして、一つ一つの知識がつながり、「わかった」「おもしろい」と思える授業に改善する。

「主体的で深い学び」には、振り返りの支援が重要である。児童が自分で学びを進めるためには、「学びに向かう力」が不可欠であり、振り返りの視点、いわゆるメタ認知の力が欠かせない。自分が今どういう状況にあるのかをモニタリングしたり、何が好きかなど自己認識をしたり、次に何をしたらよいのかを考えたりするなど、自分自身を振り返って高めていく仕組みが必要となる。自分にとって必要な学習を考え、次の一步を踏み出すことの繰り返しで、学びはつくられていくと考えられるからである。不断の授業改善に向けて、児童の姿から学びをとらえる姿勢が重要となる。

「主体的・対話的で深い学び」の実現は、アクティブ・ラーニングの視点からの授業改善である。「主体的・対話的で深い学び」の視点での授業改善は、育成する資質・能力（知識・技能、思考力・判断力・表現力、学びに向かう力・人間力）をバランスよく育てていくことを、目指している。

（３）個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実

アクティブ・ラーニングや「主体的・対話的で深い学び」のように、教えることから学びへ、教師主導型から学習者主体へ改革が進められてきた。

振り返ってみると、今回の学習指導要領改訂を受けて、「主体的・対話的で深い学び」をキーワードに授業改善に取り組んできたが、いざ実施となった時にコロナ禍になり、さらに令和の日本型教育として「個別最適な学び」「協働的な学び」という新たなコンセプトが出てきてそれぞれを追い求めた。

独自の用語が多数表れているが、次期学習指導要領でも、アクティブ・ラーニン



「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実（文科省）



幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）
中教審、2016）

グは基本的な考え方として、「主体的・対話的で深い学び」を重視して、生涯にわたって能動的に学び続ける基盤を培っていくことにかわりはない。そして、これらは、特定の学習方法に限定されたり、一方的に順序だてて行われたりするものでもない。

2 小学校音楽科における「主体的・対話的で深い学び」

音楽科における「主体的・対話的で深い学び」の考え方には、予測不能な時代を前に、音楽を通して、子供たちが自らの人生を心豊かに生き、他者と協働しながら、新たな価値を生み出すことへの期待が込められている。

（１）「主体的な学び」

やわらかな感性をもつ小学生の時期に、音楽の楽しさやよさ、美しさをできるだけたくさん経験しておくことが、知らず知らずのうちに子供たちの人生を豊かなものにしていく。

教師には、その見通しと願いをもちつつ、授業を構想することが求められる。このことは、「学びに向かう力、人間性等の涵養」に関する目標にもつながっている。

「主体的な学び」に直接かかわるのは、第５学年及び第６学年の目標（３）である。

（３）主体的に音楽に関わり、協働して音楽活動をする楽しさを味わいながら、様々な音楽に親しむとともに、音楽経験を生かして生活を明るく潤いのあるものにしようとする態度を養う。

音楽への関わり方については、児童の発達や学習の系統性等に応じて、低学年では「楽しく」、中学年では「進んで」、高学年では「主体的に」と段階的に示されている。「主体的に」とは、音楽への関わり方の質的な高まりの指標でもある。

（２）「対話的な学び」

音楽科は、普遍的な人類の文化、国や地域、強度といった様々なフィールドに息づく豊かな文化として、多様な音楽を扱っている。時間や空間を超えた「対話的な学び」を推進できる教科である。

さらに音楽科には、音楽表現という言葉によらないコミュニケーションの手段をもつ強みがある。その上で、「対話的な学び」という視点で、音楽活動と言語活動の関係を捉え直していくことが必要である。「対話的な学び」を支えるのが「学び合い」である。個人やペア、グループ、さらにはクラスや学校全体、地域で「対話的な学び」の在り方を探りたい。

（３）「深い学び」

学びを通じた子供たちの真正の理解、深い理解を促すためには、主題に対する興味を喚起して学習への動機付けを行い、目の前の問題に対して、これまでに獲得した知識や技能だけでは必ずしも十分ではないという問題意識を生じさせ、必要となる知識や技能を獲得し、さらに試行錯誤しながら問題の解決に向けた学習活動を

行い、その上で自らの学習活動を振り返って次の学びにつなげるという、深い学習のプロセスが重要である。

「深い学び」の実現には、音楽的な見方・考え方を働かせることが基軸となる。表現及び鑑賞の学習において、共通に必要な資質・能力としての「共通事項」を学習の支えとし、その過程で、対話を通じて他者の考え方を吟味し、取り込み、自分の考え方の適用範囲を広げることを通じて、人間性を豊かなものへと育むことが極めて重要である。

学習のプロセスにおいて、人類の知的活動を通して蓄積され精査されてきた多様な思考の在り方を学び、その枠組みに触れることは、問題発見・解決の手法や主体的に考える力を身に付けるためにも有効である。

アクティブ・ラーニングといっても、いろいろなレベルがある。児童に音楽の特徴を見つけるよう気付を促したいのか、音楽的感受を深めさせたいのか、興味・関心を引き出して学びに向かわせたいのか、などによって、レポート、調べ学習、表現・創作活動など、行うべき学習活動は異なる。また、なかなか自ら学びに向かうことができない児童には、自尊感情を高めることを意図した、協働的な学びも考えられる。児童の状況や目的に応じて、それに適した活動を取り入れることが重要である。

3 「主体的・対話的で深い学び」と学習環境としての ICT

質の高い深い学びを目指す中で、教員が、指導方法を工夫して必要な知識・技能を教授しながら、それに加えて、子供たちの思考を深め発言を促したり、気付いていない視点を提示したりするなど、学びに必要な指導の在り方を追究し、必要な学習環境を積極的に設定していくことが求められている。

(1) 知識基盤社会と資質・能力

高度情報社会は新しい課題を世界にもたらし、新しい解を生み出せる人間を求める社会である。つまり、これからの社会は、一部の専門家があらかじめ有する「正解」を適用するだけで解決できるものではなく、問題を共有する者が知識やアイデアを出し合い、不完全にせよ解を出して実行する。そして、その結果を見ながら解とゴールを見直すことが求められている。このような課題に対して、社会全体が応えようとしている表れが、知識基盤社会、コミュニティ基盤社会への転換と進展、ICT の利活用である。

知識基盤社会とは、新しい知識やアイデア、技術のイノベーションがほかの何よりも重視される社会である。そのイノベーションのために、他者とのコミュニケーションやコラボレーション（協働、協調）が重視され、それらが効果的・建設的に

行えるように、人と人を繋ぐコミュニティや ICT の役割に注目が集まっている。

つまり、現在決まった答えのないグローバルな課題に対して、大人も子供も含めた重層的なコミュニティの中で、ICT を駆使して一人一人が自分の考えや知識を持ち寄り、交換して考えを深め、統合することで解を見出し、その先の課題を見据える社会へと、社会全体が転換しようとしている。ここでは、その情報社会とそれに応じて求められる資質や能力について考える。

（２）指導の個別化と学習の個性化

ICT 活用や教育DXは、「個別最適な学び」というキーワードとセットで展開している。「個別」という言葉は、一人一人の個別のニーズに応じる志向性を表現し、「最適」という言葉は、本人が望んでるものと効率的に出会えるようにする志向性を表現している。そうした「個別最適」は、生活のあらゆる場面で際限なく蓄積されたデータを統計的に処理することで、レコメンド機能やマッチング機能によって具現化しうると考えられている。AIドリル、完全習得学習などがこれにあたる。

指導の「個別化」とは、教育内容や学習進度に応じた多様化を指し、子供の個性・適性によって、学習方法の最適化を図ることで、教科の学習内容の中で習得させたい知識・技能の確実な定着を目指す。一方、学習の「個性化」とは、一人一人の個人の内的なニーズや自発的に応じた多様化を指し、子供の興味・関心を生かしながら、教科の目標に迫るような思考・判断や認識を深めたり、社会の中で自己を生かせたりできるような「生きる力」を高め、個性を育てようとすることを指す。「個性化」は他者と共に対話し学び合うことで確認・発見・承認され、磨かれ豊かになっていく。指導の「個別化」で一部の英才教育を目指すのか、学習の「個性化」でこれまで救いきれなかった子供たちを救いつつ、すべての子供たちの教育という視点を堅持するのが問われている。

「個別最適な学び」には、教育の「個性化」としても展開していく必要がある。これまで教師が行ってきた一人一人を生かした創造的な一斉授業のよさを残した、子供一人一人のやりたいことや追究したい問いや自律性を重視する「子供主語」の学習の個性化が提起されている、と見取ることができる。子供たち一人一人の多様な背景に応じつつ（「指導の個別化」）、対話的・協働的にともに学ぶ協働的な学びの先に、共通目標を達成するのみならず、それぞれの生き方やつながりの幅を広げ、より自律的な学習者へと誘う（「学習の個性化」）。さらに、学校内外の社会的活動にも参加しながら、自らの人生を紡いでいけること、自分の視野の外の異質な他者と出会い対話すること、その先に学校や教育から巣立たせることが重要である。（石井英真、2020）

ICT の活用も、個人主義的学習観を解きほぐして学び合いを促し、練り上げ型授業や協働的プロジェクト、個人作業の共同化を活性化させる方向で仕組み、子とも

たち同士の学び合いを組織することが肝要である。「個別最適な学び」と「協働的な学び」は一体的に充実させることで、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向かっていく。

（３）「個別最適な学び」をどう捉えるか

前述のような授業の絶えざる改善を進めていくためには、一方で学習環境の改善及びその効果的な利用法にも目を向けていく必要がある。

「対話的な学び」を目指すグループワークでは、なかなか全員が参加する活動にならない、という悩みが聞かれる。また、活発に話し合っているが、そこに深まりが見られない、などの悩みも聞く。しかし、目に見えるような顕著な話し合いの姿は見せなくても、人の意見をよく聞いてまた読んで自己の学びを構成していく、潜在的対話的な学びをしている児童もいる。このような児童の顕在的対話的な学びをリードし、自信をもっている児童が、さらに他の子の意見を丁寧に見取りさらなる熟考を促していくなどの場合に、ICTなどのテクノロジーは有効な手だてとなる。

例えば、児童のタブレットがネットワークにつながっていれば、各自が考えていることは互いに共有できる。教員はこの間、これまで机間指導ではすべてが見取れなかった児童の姿、発言が苦手な子供の意見を取り上げたり、全員の意見を等しく見たりして、限られた授業時間を有効に使いながら議論を組むことが可能となる。

教師は、課題設定や発問を吟味し、それぞれの児童の学習スタイルや発達課題を考慮しながら、顕在的、潜在的な対話を、適切に組み立てることができる。子供は、友達の考えを参考にして、自分の考えを検討したり、新たな考えを創出したり、自分の考えを掘り下げたりする可能性をうむ。ICTを通じて、自分の考えを表出する自信をもたせ、熟考できる機会をつくる。

ICTなどのテクノロジーは、教育の原理と絡めて、授業の絶えざる改善に向けて使うことが重要で、資質・能力の育成においては、その成長をいかに見取り評価するか、が課題であるが、その点に関しても、ICTで簡単に思考のプロセスを残せるようになる。

児童の学びの履歴をもとに授業の改善を考えることは、長い目で見ると、題材レベルの授業改善、学年レベル、さらには学校全体の教育課程レベルで授業改善を考えていく根拠資料として、その記録が有効となる。

このように、評価情報を収集し授業の改善につなげるアセスメントツールとしてのICTの活用をより意識すると、授業改善をより効果的に進めることができ、さらに言えば、カリキュラム・マネジメントの取り組みにも期待できる。

（４）「主体的・対話的な深い学び」の授業デザインと評価

授業にアクティブ・ラーニングの視点を取り入れる際には、ゴールの姿と方法・

環境の両方をしっかりおさえておく必要がある。これからの授業のデザインは、教員がその授業で身につけさせたい教科の内容と資質・能力を、子供の姿のアセスメント情報からより明確にし、学習の内容や方法を検討することが、さらに重要となる。

題材に入るまでに必要な前提となる力を、このクラスの子供がどれくらいもっているか（診断的評価）を見定める。だから、この題材や授業では、ここから入り、この資質・能力のこの部分を伸ばす、といった、ゴールを明確にする。「問題解決・発見力」を培う学習プロセスや、そこでの ICT を生かした学習活動の組み合わせのバリエーションを、イメージとして提供するなど、題材デザインは“学びの連続体”としてとらえ、入口と出口の子供の姿を明確にし、そこでの学びが確かで豊かになる学習活動の組み合わせを考え、どの場面でどのように学びの姿の成果を見るか（形成的評価につながるチェックポイント）を計画し、授業全体をデザインしていく。

授業にアクティブ・ラーニングの視点を取り入れ、「学ぶ力」や「学びに向かう力」等をより意識して指導していくためには、そこに向けて、ここでは思考を広げたいとか、ここでは振り返りをさせたいなど、児童の学びの姿をイメージしながら、ダイナミックな活動の流れをもつ効果を見定める小さな目標（学習活動やそれがもつ効果を見るチェックポイント）の設定が大切である。

21 世紀型能力のような新たな学びには、それに対応する新たな評価方法が必要である。学習結果の到達点を測る評価（総括的評価）だけではなく、学習の進み具合を捉え、次の段階に進むために、今やっていることをどう変えたらよいか判断するための、形成的評価である。このような評価を学習の進行に合わせて行うためには、学習プロセスの記録を取り、分析・共有して次のステップを検討する、強力な ICT 基盤が必要である。ICT 基盤が強固なものであれば、教員はその ICT 環境の維持や新しい評価方法に翻弄されることなく、新しい学びの構築に集中することができる。



教材開発の基礎としてのインストラクショナルデザイン

【参考文献】

- 1) 岐阜女子大学編「教材開発の基礎としてのインストラクショナルデザイン」
- 2) 石井 英真「教育変革の時代の羅針盤 教育 DX 個別最適な学びの光と影」
(2024.3)
- 3) 中央教育審議会「論点整理」(R6.9)
- 4) 宮下俊也「平成 29 年改訂小学校教育課程実践講座音楽」(ぎょうせい、2018.1)
- 5) 津田正之他「特集Ⅱ 学習が深まった子供の姿を大切にした音楽の授業づくり」
(初等教育資料、2017.1)

課 題

1. 「主体的・対話的な深い学び」を実現するための視点を説明しなさい。